

## 気管支喘息のお話

喘息はアレルギー（ダニ、ハウスダストなど）、風邪などの感染症、たばこの煙、天候の変化、ストレス、運動などの様々な要因によって引き起こされますが、共通しているのは、患者さんの「気管支が過敏である」ということです。

### 過敏な気管支には 慢性的に炎症が起こっている

近年、喘息という病気が急速に解明され、治療方針が明確になってきました。その最も大切な事実「ある程度慢性化した喘息患者さんの気管支には、好酸球性（こうさんきゅうせい）の炎症が起こっている」ということです。好酸球とは白血球のなかの一種で、アレルギー疾患などで増加します。つまり、持続的な炎症を引き起こす好酸球が、気管支を過敏にしていく中心的な役割をしているということです。喘息患者さんの気管支を顕微鏡で検査すると、まさに炎症がおこっているという状態で、そこ

には犯人である好酸球をはじめとする炎症細胞がたくさん観察されます。

### 慢性の炎症が続くと気管支の リモデリングが起きる

発作が起きていない状態でも慢性の炎症が持続していると、気管支の粘膜の表面が傷つきはがれ、粘膜のむくみがいつまでも改善されず、また気管支平滑筋やその外側の外膜という部分もぶ厚くなり、なかなか正常な状態には戻りません。

この様に、もとに戻らなくなった変化のことを「リモデリング」といいます。炎症が持続してリモデリングが進行すると、気管支の過敏性はさらに悪化していきます。

### 喘息は典型的な「悪循環病」

気管支の過敏性が悪化すると、今度は、いままでよりも小さな刺激でも発作につながるといふ悪循環に陥ります。つまり、喘息は典型的な「悪循環病」なのです。と

いうことは、その循環を逆に回せば治療になるということです。発作を抑えた後も、炎症を抑える治療を続けることにより、過敏性が改善し多少の刺激では発作が起きにくくなってきます。

### Early intervention（アーリー・ インターベンション）とは？

気管支壁のリモデリングが進行しないうちに、早期から吸入ステロイドなどにより気道の慢性炎症を抑える治療方針を early intervention といい、成人喘息では有用性が確立しています。小児喘息では成長・発達などへ

の影響も一部懸念され、成人ほど吸入ステロイド薬の導入時期は早くはないようですが、コントローラが不良な場合は考慮すべき治療法です。

### 喘息治療のガイドライン

喘息の薬物治療のガイドラインが専門家によって作成されています。詳しくは <http://www.med.or.jp/chishiki/kikansizensoku/001.html> を御参照ください。薬物治療だけでなく、環境整備（ダニやハウスダストを減らす環境作り）も大切な治療の柱ですので心がけましょう。  
(医師会)